

「喀痰吸引」も呼吸器科の看護ケアの大きな仕事であり、患者はその上手さ・下手さに敏感である。経験がありそうでも下手だったり、若くてもトップクラスの上手さだったり、その腕のバラツキは大きい。その背景にあるのは、看護のマインドや忙しさだけではない。

今回の入院を振り返ると、私の予想以上の回復ぶりに驚き、それを喜びながら懸命にサポートしてくれた専門職の見えない力をつくづく感じた。「CRP（炎症反応）がコンマ以下の数値になった」と大喜びで病室に来てくれた主治医、「金曜日までに帰れるようにしよう」と階段昇降に取り組んだPT、「歩行しているのを見ると涙が出そうなくらい嬉しく」と喜ぶ看護師など、患者の回復がスタッフをどうも勇気づけるのかと嬉しい発見である。

それには、私の4年前の入院を知る看護師が半数以上もいたこと、中には前回の入院時に看護学校の実習で採血の実験台になってあげた若い看護師なども働いていたこともある。そうした看護スタッフが活躍している療養・入院生活に安心、満足を得られている。

若い看護師には、「また入院して来るから、病院を辞めないでくれよー」とお願いしたが、「かかりつけ医師」や「かかりつけ薬局」に加えて、「かかりつけ看護師」の可能性と期待も生き残った者から提起してほしい。

(終わり)

## 「高齢者住宅」

変わらなすぎず

～安心の住まいに向けて①

一般社団法人北海道高齢者向け住宅事業者協会(以下「北海道高住協」)の代表として、これから、何回かに分けて高齢者向け住宅の今後の展望などを話したいと思います。

私どもの団体は、2012年3月に北海道高齢者向け住宅事業者連絡会として発足し、2014年10月に協会として一般社団法人格を取得しました。発足のきっかけは、介護保険施行から札幌市で最後の竹の子のように増えてきた高齢者向け住宅について、2009年に札幌市がその実態調査と評価及び質の向上のために「安心・快適住まいるアップ事業」を3年間の時限事業でスタートしたことに始まります。この事業で志の高い高齢者向け住宅事業者が集まり、実態調査と質の向上のための勉強会などを行っていましたが、事業が終了した際、今まで蓄積した知識と連携をそのまま無くすのは惜しいということから連絡会の発足となりました。

そのような経緯があり、北海道高住協は住宅の運営の質を向上させることを目的として活動しています。また「高齢者向け住宅」JCSJの

## 「一般住宅、としての質にこだわって」

にしたのは、札幌市には有料老人ホームやサ高住などの制度に拠らない一般の住宅でありながら高齢者を対象とした住まいがとて多かつたためです。2011年10月にサ高住の登録制度ができ一部の住宅はサ高住に切り替わりましたが、まだ制度に拠らない住まいも多い状況でした。行政はそれらの住宅を「未届け有料老人ホーム」と位置付けるようになりましたが、私どもは「シニア向け賃貸住宅」と表現しています。ですから私どもの会員の対象は、①有料老人ホーム、②サ高住、③シニア向け賃貸住宅の3種の運営形態となっています。

なお、「安心・快適住まいるアップ事業」の目的の一つであった評価事業は様々な隘路があり結果を残すことができませんでした。引き続き取り組みました。連載の中で紹介したいと思えます。(北海道高齢者向け住宅事業者協会理事長・奥田龍人)



「連絡会」として発足した2012年の設立総会。多様な住まいの事業者が集まった